漢法苞徳塾資料	№. 303
区分	論説
タイトル	**六部定位脈法による証決定の問題性について**
著者	八木素萌
作成日	

【１】『経絡治療』方式における「証」は四診を総合すると言うが、「証」決定に際しては「六部定位脈差診」の判断が主導的なものとなっている。この事は周知のことであるが、これには実に多くの問題点がある事が、臨床家の間で次第に認識されて来た。

【２】「脈の虚実」と「病証の虚実」と「切診の虚実」とは等価概念であるのか？
この三者が等価であると言う前提が成立しなければ『経絡治療の証』は成立できない。

【３】『傷寒脈法』『奇経脈法』『五臓脈状』と、『六部定位脈法』との関係の検討において、『六部定位脈法』の診定と『他の脈法』における診定との間には矛盾する所は無いのであろうか？
具体的に検討してみる必要があるので、『五臓脈状』の「平」「病」「死」の脈状、『傷寒脈法』による「三陰三陽の脈」、『奇経脈法』の脈状、これらを検討してみよう。

【４】『六部定位脈法』の臓腑・経脈の配当には問題は無いのであろうか？
諸家の説を検討し、これを作表して比較対照すると、左右の関上の配当および上中下の三部の意味について、見解の相違は無いが、これ以外では見解の相違が見られる。歴代の医家の見解に共通性が見られる部分のみを採用すべきでは無いか！！

【５】『六部定位脈法』で決定された「証」に対する「本治法」の効果の程度についての臨床家の認識、または「標治法」も「本治法」も行なう場合の効果の程度についての臨床家の認識、これ等はどうなっているだろうか？

論理的には、「脈の虚実」「病の虚実」「切診の虚実」が等価であるという前提に立って、「本治法」の選穴と技法が決定されているのであるから、「脈」「病」「診」の三者の虚実が等価である場合のみに、有用であったと認識され得るものであろう。では、このような場合と言うのは臨床上どの程度の割合であろうか？

『難経』の記述によれば、「脈」と「病」の間に矛盾する所があるのが問題なので、その矛盾が「相生的なもの」か「相剋的なもの」かをこそ問題にしている。「脈」「病」の間に矛盾が見られない場合については、「予後判断」論の対象にはされていない程である。従って、「脈」「病」「診」の三者に矛盾が見られない場合は、治療の対象となる程の疾病の場合には非常に少ない、このように見なしていると言えるのである。

【６】『病状の脈』や『季節の脈』などと、『六部定位脈』との関係の検討

☆平脈→『難経』の説…　　、『内経・　　篇』の説…
☆病状の脈→『難経』の説…　　、『内経・　　篇』の説…　　、
☆季節の脈→『難経』の説…　　、『内経・　　篇』の説…　　、

【７】『温病論の脈論』との関係の検討

『難経』五十八難の「中風の脈は　陽浮にして滑　陰濡にして弱なり、湿温の脈は陽浮にして弱陰小にして急なり（温は伝写の誤りであろうとの説がある〈医学求真・呉考槃・p.37〉―注・八木)、傷寒の脈は陰陽俱に盛にして緊なり、熱病の脈は陰陽俱に浮これを浮にして滑これを沈むれば散なり、温病の脈は行りて諸経に在り何経の動なるかを知れざるなり各々其の経の所在に随ひて之れを取れ」という記述の「温病の脈」については、「経」を経脈に意味に解釈する者や、「経＝つね」の意味に解釈する者もあって、解釈のむつかしい部分である。しかし、『温病正宗』（王徳宣・三章弁脈の中の清．楊栗山「温病弁脈」に温病が種々の脈状を呈する事が述べられている）の「…傷寒は多くは脈に従い温病は多くは証に従う所以は蓋し傷寒は風寒の外入にして循経の伝なり温病は佛熱の内熾にして経に溢るるものなり」と記述されているので、かなり解釈が明快になったと言えるようである。此れに言う所の「在諸経」の脈診は、「六部定位脈診法」に言うものとは異質である。病証と脈状の意味する所とを考察し勘案して「在経」を把えているのである。

【８】『傷寒論』の「六経の脈状」と「経絡治療的六部定位脈法」との関連について

【９】『奇経の脈』の問題との関連について

【10】『補瀉論』との関連について

「虚は補し」「実は瀉す」は『内経』以来の治療上の大原則である。「虚実」とは「邪気盛んなれば実」「精気奪わるれば則わち虚」という『素問』通評虚実論第 28 の記述と、『霊枢』九鍼十二原第 1 の「……凡用鍼者　虚則實之　満則泄之　宛陳則除之　邪勝則虚之」

【11】『脈診をどのように位置付けるか？』の問題と、『補瀉決定論』の問題について

【12】「経気の有余・絡気の不足」場合について「絡気の不足し経気の有余の者は、脈口は熱にして尺寒ゆるなり、秋冬は逆と為し春夏は従と為す、主病を治する者なり」「経満絡虚刺陰灸陽」と述べ、「経気の不足・絡気の有余」の場合については「尺は熱満し、脈口は寒えるなり、此れ春夏には死し秋冬には生ず」「経虚絡満灸陰刺陽」と言う。従って【「絡気」は浅く「経気」は深いもの】と言う認識があることが此処には見られ、また「経気は〈満〉」なら「脈口は熱にして」となり、「経気の不足」なら「脈口は寒濇」と言うように、「脈口は経気」「尺皮は絡気」と認識している事が示されている。また、「脈口」の状態を言うときに「熱」「寒濇」のように、脈状を表現する場合の言い方としてはやゝ特異な表現であると言わなければならない。この「経気有余絡気不足」

や「経気不足絡気有余」の診断を述べているのは『素問』通評虚実論第 28 の記述である。

【13】『素問』通評虚実論第 28 の四時の取穴は「春亟治経絡・夏亟治経兪・秋亟治六府・冬則閉塞・閉塞者用薬而少鍼石也・所謂少鍼石者・非癰疽之謂也…」

【14】

【15】

【16】

【17】

【18】

【19】

【20】